関西大学文化交渉学研究拠点
Aug. 2018 No. 4

関西大学文化交渉学
ICIS NEWS LETTER
ニューズレター

CONTENTS

— 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）始動！
— 東アジア文化交渉学会第10回国際シンポジウム開催
— 研究員の活動報告

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）始動！

私たちの東アジア文化研究はすでに「東アジア文化研究の関大」「関大と言えば東アジア研究」として世界的な認知を受けてきています。また、私たちが提唱した新しい学問体系である「東アジア文化交渉学」およびその方法論の一つである「周縁からのアプローチ」は、いまや世界の学問研究の主流とも言えます。あわせて、本学総合図書館の個人文庫を中心とするコレクションや博物館は世界に誇るべき東アジア関係資料の宝庫であり、それらのデジタル化もすでに相当量が公開され、そのノウハウも蓄積されています。そうした面においても、本学の貴重な資料群は、世界の研究者の垂涎の的となっています。

今回、私たちは、こうした泊園書院を起源とする200年にわたる長き学統の中で培われてきた「関大の東アジア文化研究」の学術リソースと国際的学術ネットワークを基盤として、**「関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（Kansai University Open Research Center for Asian Studies: KU-ORCAS）」**を立ち上げました。

本センターでは、デジタル知識基盤社会に適合した人と世界に開かれた「デジタルアーカイブ」の構築を中心として、特に「東西文化接触とテキスト」「東アジアの中の大阪の学統とネットワーク」「古都・史跡の時空間」という３つの研究ユニットを中心に活動していきますが、同時に、研究リソースのオープン化、研究グループのオープン化、そして、研究ノウハウのオープン化という「３つのオープン化」のポリシーのもとに、これまでの学問領域や人の垣根を越えた新たな人文知の創造に向けて、世界に開かれたハブ的機能を備えたオープン・プラットフォームを形成し、**「世界的な東アジア文化研究を牽引する大学」**として、世界最高水準の東アジア文化研究拠点を形成すべく活動していきます。

KU-ORCAS は、東アジア関係の研究者のみならず、異分野研究者、教育機関の他、企業、自治体、加えて関心のある一般市民までといった様々なステークホルダーを対象としており、まさに世界のすべての人、すべての学域に開かれた空間です。私たちは、ここから世界の東アジア文化研究と人文学の新しい地平が切り拓かれるものと確信しています。

多くの知恵と力を結集して、KU-ORCAS を世界に冠たるアジア研究拠点にしていきたいと考えています。

（KU-ORCAS センター長　　外国語学部教授　内田慶市）

AR コンテンツ　動画で KU-ORCAS の紹介をしています

・内田センター長の写真に端末をかざすと、KU-ORCAS のプロモーションビデオをご覧いただけます。

ご利用方法

①AR 無料アプリ「COCOAR 2」をダウンロード
②アプリを起動して、対象画像に携帯端末をかざす

COCOAR 2　iPhone　Android

東アジア文化交渉学会第10回国際シンポジウム開催

去る５月12日㈯、13日㈰の両日、香港城市大学において、東アジア文化交渉学会2018年度年次大会、及び第10回国際学術シンポジウムが開催された。大会のテーマは、**「東アジアの海洋―交流・ネットワーク・流動」**であり、日本、韓国、シンガポール、中国、台湾、香港等のアジアの国と地域及びヨーロッパ、アメリカから、134名以上の研究者が大会に出席した。

大会は、鄭振滿教授（厦門大学）による「閩南祠廟碑銘中的國際網路」と金文京教授（鶴見大学）による「二十四孝の変遷及び東アジアへの伝播」、韓子奇教授（香港城市大学）による「石頭記：宋王臺的三個面貌」と題する３人の基調講演が行われ、２日間にわたり、29の分科会で研究発表を行った。

また、2019年東アジア文化交渉学会第11回国際学術大会は、ドイツのフリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルクにて開催されることが承認された。

東アジア文化交渉学会第11回国際シンポジウム

テ ー マ：「東アジアの知識の変遷と超越―科学技術史におけるグローバルネットワーク」
会　　場：フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルク（ドイツ）
日　　時：2019年５月11日㈯、12日㈰

東アジア文化交渉学会第10回国際シンポジウムに参加して

去る５月12日㈯、13日㈰、香港城市大学にて、東アジア文化交渉学会第10回国際シンポジウムが開催された。本年度の大会テーマは「東アジアの海洋――交流・ネットワーク・流動」であった。「江戸の日本橋より唐（から）、阿蘭陀（オランダ）まで境なしの水路なり。」とは、江戸中期の経世家、林子平（1738-1793）が寛政３（1791）年に著した『海国兵談』の一節だが、東アジア文化の形成過程において、儒家思想や仏教は言うに及ばず、人や物の交流も〈海洋〉がなければ停滞していたであろう。この度の大会において、〈海洋・東アジア〉という視野に立って、物質文化、移民とアイデンティティ、知識の伝播と生産、および海港都市などのテーマが検討された。

鄭振滿氏（厦門大学教授）「閩南祠廟碑銘中的國際網道」、金文京氏（鶴見大学教授）「二十四孝の変遷及び東アジアへの伝播」、韓子奇氏（香港城市大学教授）「石頭記：宋王臺的三個面貌」の三つの基調講演は、いずれも熱のこもった講演で、会場の聴講者は熱心に聴き入っていた。

さて、本年度のパネルは、東西の文化交流、言語接触、教育、文学、そして近世・近代における思想・哲学の伝播形態など、29パネルが出揃い、それぞれ意欲的な発表と活発な議論が展開され、実り豊かな大会となった。本学会大会が開始された当初は、思想・哲学・宗教系のパネルが殆どなく、いささか不満を抱いていたのだが、ここ数年、この分野での参加が徐々に目立ってきており、今回の大会もこの分野のパネルが複数あって、日本および中国の新進気鋭の若手研究者たちによる密度の高い発表が多くあり、啓発されるところ多大であった。

最後に提案したいのだが、開会式の挨拶の同時通訳は当然あってしかるべきであり、また基調講演の日中韓英の各国語による要約原稿は参加者の方々のために事前に準備されることが望ましい。一考願いたい。

（文学部教授　井上克人）

研究員の活動報告

今号では研究員の指導のもとで
研究活動を行っている方々の研究活動をご紹介します。

学会＝研究発表＋α

私は2016年９月、日本学術振興会特別研究員として来日し、関西大学東アジア文化研究科内田慶市教授のもとで文化交渉学を学んでいます。

昨年５月13、14日、北京外国語大学グローバルヒストリー研究院で開催された東アジア文化交渉学会に初めて参加しましたが、第10回目となる今大会でも発表する機会を得て、今回は香港へ足を向けました。大会テーマは「東アシアの海洋―交流・ネットワーク・流動 Maritime East Asia — Network, Exchanges, and Mobilities」で、香港城市大学で行われました。

学会に出席するたび、発表をするのはもちろん、聞くだけでも収穫が大きいといつも感じるものですが、これほど大きな規模の学会となるとより一層強く感じます。多種多様な領域の大勢の学者が一同に会するのは、一年に一回だけ行われる学会ならではであり、まだ未熟な学者である私にとっては貴重な機会です。

文化交渉とは抽象的なことではなく、以前から起こっていたことで、たとえば国際学会で行われてきたことも、単なる“意見交換”だけではなく、そこには“文化交渉”も反映されてきたと言えるでしょう。

今大会で、予てから他の学会で、あるいは中国に留学した時に知り合った様々な国籍の先生や仲間とまた会うことができましたが、それは本当に喜ばしいことでした。

特に中国留学時の学友との再会は、それぞれの研究領域で確実に前進していることを互いに気づかせてくれ、嬉しさもひとしおでした。また、研究の方面では、大会中先生方から色々な意見と助言をいただきました。自分の研究結果を紹介するだけではなく、研究の未来図を見直す重要な機会ですから、私よりも若い学者の皆さんには必ず学会に参加し、発表をしてくださいと勧めたいと思います。

もうひとつ、私にとって嬉しかったことは、しばらくお会いしていなかった日本人の先生、先輩とお話しした時“トラさんは日本語が上手になりましたね”と言われたことです。大学時代に日本語を勉強しましたが、その後全部忘れてしまい、日本に来てからもまだ全然うまくなっていないと思っていた日本語で話せたことは、私にとっては嬉しい驚きでした。

第10回東アジア文化交渉学会大会に参加し、“生きて行く限り学び続ける”の精神をあらためて強くしました。私の日本での研究期間はもうすぐ終わりますが、これからも更に自分の研究と日本語の勉強に力を入れて頑張りたいと思います。

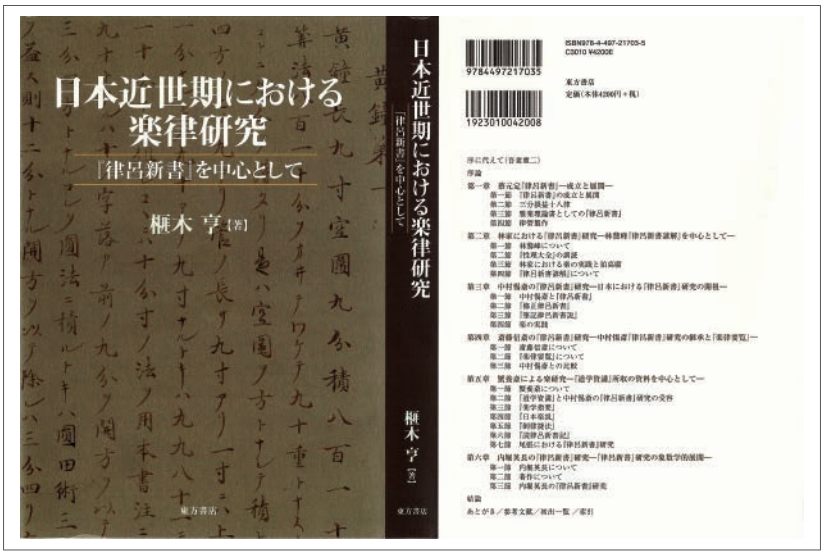
最後に、ご指導いただいた先生と先輩に厚い感謝の気持ちを表したいと思います。ありがとうございました。Grazie!

（Tola Gabriele　日本学術振興会特別研究員）

榧木亨氏が第35回田邉尚雄賞を受賞

このたび、榧木亨氏（東西学術研究所非常勤研究員・東アジア宗教儀礼研究班）が第35回田邉尚雄賞（2018年度東洋音楽会賞）を受賞されました。

受賞の対象になった作品は『日本近世期における楽律研究――『律呂新書』を中心として』榧木亨　著（東方書店、2017年３月）です。



デジタル化時代におけるグローバル中国語教育史国際シンポジウム開催

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）では、中国を拠点とする国際学会世界漢語教育史学会との共催で、国際シンポジウムを開催します。

デジタル化時代におけるグローバル中国語教育史
国際シンポジウム

主催　KU-ORCAS
世界漢語教育史学会

開催場所　関西大学千里山キャンパス
開催日程（予定）
10月20日（土）　開幕式、大会基調講演、個別研究発表
10月21日（日）　個別研究発表、大会基調講演、閉幕式

世界漢語教育史学会は、国際中国語教育研究のさらなる発展と、グローバル中国語教育史、東西文化交流史、域外漢学史研究の促進を目標として設立された国際学会で、今年で10周年を迎えます。歴史のまだ浅い学会ではありますが、毎回100人以上が参加しており、認知度、開催規模ともに増加しつつあります。

今年度のシンポジウムは、デジタル化時代における中国語教育史研究の可能性について新たな知見を見出し共有することを目指し、KU-ORCAS との共催で開催することとなりました。

関西大学での開催は2007年以来の２回目です。

発表者人数は例年より少なくなりますが、活発な議論が展開されることが期待されます。

編｜集｜後｜記

関西大学文化交渉学ニューズレター第4号をお届けします◆今号の巻頭言は、2017年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業に選定された関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）のご紹介と今後の活動方針です◆東アジア文化交渉学会第10回国際シンポジウムは例年どおり5月第2週目の土日に開催されました。2回目の開催となる香港城市大学のスタッフの皆さん、そして文化交渉学会設立以来本会をパワフルに支えてくださっている事務局のＡさんのご尽力で、盛会のうちに閉幕しました◆井上先生からは学会の成長とさらなる充実を願う言葉が寄せられました◆TORA さんからは学会参加者の個々の成長に対する喜びと、同じ若い研究者への温かいエールが寄せられました（編集者）

表紙右上掲載写真：
【左上】第10回東アジア文化交渉学会会場風景、【右上】第10回東アジア文化交渉学会にて（左から）李雪涛　北京外国語大学教授、李孝悌　香港城市大学教授、王克馬　Friedrich-Alexander-University Erlangen-Nuremberg 教授、【左下】サンタンナ門（ヴァチカン市国入国口）、【右下】ヴァチカン図書館エントランス

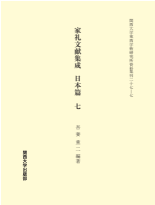
図書の出版

■ 関西大学東西学術研究所資料集刊

北京官話全編の研究
—付影印・語彙索引　中巻
内田　慶市 編
2017年5月31日発行／760ページ

天保七年薩摩片浦南京船金全勝號資料
—江戸時代漂着唐船資料集十—
松浦　章 編著
2018年2月20日発行／382ページ

家礼文献集成　日本篇　七
吾妻　重二 編著
2018年3月30日発行／384ページ



日本の近世近代絵画と文化交渉
中谷　伸生 著
2018年3月30日発行／298ページ

北京官話全編の研究
—付影印・語彙索引　下巻
内田　慶市 編著
2018年3月31日発行／962ページ

平山省斎と岩瀬忠震
—開国初期の海外事情探索者たち（II）—
陶　徳民 編著
2018年3月31日発行／404ページ

発行：関西大学文化交渉学研究拠点
（Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies）

〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL：06-6368-0653　FAX：06-6339-7721
E-mail：touzaiken@ml.kandai.jp
URL　http://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/

発行日：2018年（平成30年）8月